



Title	<図書紹介>黒田智子編『作家たちのモダニズム：建築・インテリアとその背景』
Author(s)	橋本, 英治
Citation	デザイン理論. 2003, 43, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53167
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

黒田智子編

『作家たちのモダニズム — 建築・インテリアとその背景 —』

学芸出版社 2003年

橋本英治／神戸芸術工科大学

近代は都市が巨大化し、人口が増大し、世界に人がひしめき合った時代である。人が増えれば、その住まいとしての建築、そして、その内部を彩るインテリアが多数必要になり、それに関わるものや人々も増大する。かくして、建築家やデザイナーが多数輩出されることとなる。

モダニズムを論じることは、その対象の背後に圧倒的多数の人やものが控えていることを覚悟しつつ、それをどのような切り口で切り捨てるか、そうした格闘を伴っているようである。多数であること、大量であること、多様であること、それを事細かに、かつ網羅的に分析、記述することは大変な時間と労力を必要とする。それはつらい作業である。百科事典のごとく、物量にモノを言わせて、ふんだんに時間をかけて全何巻といった決定版の大作を生み出すのもひとつの方法であろう。それこそモダニズムの思想かもしれない。

しかし、そうした圧倒的多数の対象に正面から討ち入ることは、著者（編纂者）にとっては結果的に計り知れない満足感があるかもしれないが、読者にとってはアカデミックな重圧を感じさせることともなりうる。

むしろ、建築やデザインを志す読者に対して、多少の強引さをよしとして、先々の構造を見透かす案内図的な書籍があってもよいはずである。そういった意味で、『作家たちのモダニズム』は14人の建築家やデザイナーを、それぞれ若手、中堅の研究者が簡潔にまとめたオムニバス（omnibus＝乗合自動車）であり、案内図の役割をはたしている。

ウィリアム・モリス、アントニオ・ガウディ、

フランク・ロイド・ライト、チャールズ・レニー・マッキントッシュ、ヨゼフ・ホフマン、アイリーン・グレイ、ブルーノ・タウト、ミース・ファン・デル・ローエ、ル・コルビュジェ、ヘリット・トーマス・リートフェルト、エル・リシツキー、アルヴァ・アールト、マルセル・ブロイヤー、ジョゼッペ・テッラーニ

こうして14人を羅列してみるだけで、近代の建築家・デザイナーが本当に沢山いること、豊饒であることを垣間見させてくれる。そして、彼らはそれぞれ活動地域、主義主張等によって相互に絡み合い複雑な関係を作り上げている。

こうした著名な建築家・デザイナーを、『作家たちのモダニズム』では、あえて生まれた年の順（こればかりは、各個人が自らの努力によっていかんともしえなかった偶然の結果である）に配列し、乗合自動車ならぬ一冊の書籍にまとめたことは、それだけで気持ちがいいものである。各人の著名度の差や研究者の数、著作の多少によってページ数（文字数）が変化するこれまでの数々の記述に対して、それぞれに割り当てられたページは8ページと厳密に均等配分されている。その配列には前提となるいかなる理論もない。歳の順があるだけだ。特定の人物と人物を意識的に結び付けることもなく、書籍の空間が粛々と成立している。まるで日めくりカレンダーのように次々とページをめくることが出来る。

さらに、その各セクションが

- 1：各人物が生きた時代背景
- 2：その人の生涯

3：理念・方法

4：作品

によってこれまた厳密に構成されており、すべての章が相同の構造をもっている。どの部分から読み始めても的確にその目的をつかむことが出来る。飛び石のごとく14人の生涯だけを読むことも可能だし、作品だけを眺めることも可なのである。あるいは、各章末の参考図書欄に目を通すことで、それぞれの建築家・デザイナーがどういった研究の対象になっているかすばやくつかむこともできる。

おそらく、このような構成だからこそ以下のことが議論の対象に上ってくるだろう。何故14人なのか、そして、選ばれた人々と選ばれなかった人々（编者自身が言及しているグロピウス、アドルフ・ロース他）の選択の基準は何か。

もとより、14人はたまたま同じバスに乗り合わせた偶然の乗客である。そして同時に、14人をそれぞれ別の解説者が論じていることによって、各々の要素の独立性を保障している。誰が選ばれるか、選ばれないか、そうした因果関係を反古にして、始まりも終りもない書籍の体系を築いている。これは14人が1人に減っても、100人に増えても、あるいは1000人であろうとも同じことである。読者は14人という偶然を楽しめばよいのである。

本書は序章を加えると15章となる。この15章はレッスンとしてちょうどいい分量であろう。物事を考えるには、ある種のリズムが必要である。そして、そのリズムに慣れてくれば、新しい跳躍が可能となるはずである。中学校で初めて習う英語の教科書がそうであったように、15回の同じ構造を持つレッスンを繰り返し、モダニズムの世界に足を踏み入れることはトレーニングとして心地よいことだと思う。

建築・デザインを考える一步前の方々への

テキストブックとして楽しい本である。